

---

# トリガ - ハッピ -

メイリエ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トリガ・ハッピ-

### 【Zコード】

Z8996C

### 【作者名】

メイリヒ

### 【あらすじ】

平凡な毎日に、どこか現実感を持てない少女「相川さゆり」の帰宅路で起こったとある連續殺人事件。自身の存在に実感を持てないさゆりは、警戒することもなく学校からの帰りにその道を使い、そして不思議な神父の服を着た男性と出会う。直後現れる連續殺人事件の真相、そして展開される見たこともない不可思議な「戦い」それは、秋風の心地よい夕暮れだった

## 第一話・クレコレハッピーイーストウッド

「不思議なこととこいつのは存在しない」  
昔、そんな話を聞いた。

この世の不思議なんて、結局は全て化学の説明できるんだそうな。  
ただ、その「不思議」が起る瞬間つてのはいつも唐突にやつてくれるわけで、

そうすると大概は一部の人間しか「不思議」を体験できない。  
だけど普通の人つてのは不思議な事に慣れてないから、その体験の内容を聞かれても

「いやー不思議でした」って言つしかないらしい。

だから不思議の多くは科学で証明できるはずが、その語り部の曖昧さによつて

いつも謎のまま終わつてしまつといつ。

そんな話を、昔聞いた。

で、だ。

何故いきなりオレがこんな話をしだしたかと言つと・・・  
オレが今体験することを後で聞かれても、たぶん「いやー本当に不思議でした」

としか言えないだろうなーなんて、そう思つたからだ。

「あのー」

人つてのはあまりに混乱すると逆にとんでもなく冷静になるやつ。

今オレの額に向けられている銃口は、まるで氷みたいにひんやりと  
冷たい銀色をしていて、

この道具が人を殺すための物であることをとても納得させてくれる  
雰囲気を持っている。

だけどもオレはそんなことも何のその、平然とした声でオレに銃口

を向ける

人物に話しかけていた。

「あ？」

その人物・・・咥えタバコにサングラス。そしてなぜかキリスト系教会にいる

神父の服といふとでもミスマッチな格好をしたその男性は、まるでそこらの

チンピラのような声でオレに返事を返してくれた。

「あのー・・・それ、何なんですかね？」

薄暗い街灯が照らす男性の後ろには、大きな大きな毛むくじやうの塊が

どつしりと横たわっていた。

その塊からは今もどろどろと真っ赤な液体が流れ出しており、その様子からそれが

いわゆる「肉塊」とか、もうちょっと丁寧な言い方をするならば「死体」と

呼ばれるものであることがわかった。といふか、その肉塊はさつきまで動いていた。

「あのー・・・」

オレは短い返事を返したまま不機嫌そうに銃口を突きつけている男性に

恐る恐るもう一回同じことを言った。

「それ・・・何なんですかね？」

不思議といふのは、やつぱりただただ不思議なもんらしい。

世の中はすんだい。今も昔も。

ニュースを観れば連日の殺人事件報道があり、本を開けば破滅主義バリバリの

思想オナニーがやつたらめつたら書き連ねられている。

クソったれだ。どいつもこいつもクソったれだ。

まあ、そのクソの中には今日もけたたましく唸り声をあげる目覚ましに神経を

逆立てているオレも含まれるわけだけども。

「クソが！死ね！死ね！死ね！」

無駄に耐久度の高い目覚ましに寝起きの右ストレートを叩き込む。肩まで伸びた髪をクシャクシャと搔き乱して、いつも通りの低血圧加減に

ウンザリしながら洗面台へと向かつた。

カーテンからは朝日がキラキラとベッドの上に降り注いでいて、それは

憂鬱な一日の始まりをまざまざと実感させた。

今日もいつもと変わらない、ただひたすら浪費していくだけの日々。正直生きがいなんて物はない。熱中することもない。毎日は楽しくも無い。

だけど死ぬほど絶望もしていない。だから死はない。そんな日々。しかしだだだ意味のない生活も、人の一生では義務であるのだ。顔を洗つて若干意識をハツキリとさせたオレは、冷蔵庫から出したワイドーラインゼリーを咥えながら身支度を整えた。

「ん？」

いつもと同じ手順を繰り返しながら、若干の違和感を覚える。胸を固定する下着の締め付けが、少しばかり強くなつていた。

「・・・マジかよ」

いわゆる成長期の身であるオレは、あつという間に体が変化する。たとえばそれは急激に身長が伸びることであつたり。急に顔つきが大人っぽくなることであつたり。

同世代の中でも大きめな胸がまた少し大きくなつたりすることであつたりする。

「また買い替えかよ・・・クソ・・・」

朝一番の憂鬱に悪態をつきながら、少しきつめのブラを着けた。

ここ1年でどんどん大きくなる胸は、プロポーションに一切の興味がないオレに

とつては邪魔なものでしかなかった。

床に転がっていたリモコンを拾い上げてテレビをつけないと、朝のニュースで

無表情なアナウンサーが原稿を読み上げていた。

「昨夜未明、赤街駅付近で女性が何者かによって殺害される事件が・

・・・

淡々と語られる事件の内容を聞きながら、オレはコーヒーの粉を入れたカップに湯を注いだ。

また通り魔か、最近多いな、なんていつも通りのセリフを吐きながら、ゆっくりと

カップの中身に口をつける。

口内に感じるコーヒーの苦味と温かみが、オレの意識をクリアに透き通らせていった。

「女性は普通ではありえないような凄惨な殺され方をしており、この事件は

ひたすら謎に包まれたものとなつております。

テレビから流れる無機質な声が、ふうっとため息をついたオレの耳に、ぼんやりと届き続けた。

「それにしても・・・今日は冷えるな・・・

支度を終えて玄関まで出たオレは、靴を履きながらそう呟いた。

今は10月、さんさんと降りしきる朝日の中にも、冷ややかな風が混じりだす。

築30年の古アパートのドアを開けて見れば、今日も始まる一日が

透けて見えた。

体中の細胞一つ一つが認識している今日といつ日を、ただただ反復する。

何となくで過ぎる一日が、また今日も始まった。

「よーしそれじゃーホームルーム終わり。委員長、号令かけてー」  
まだ若い教師の声が、教室の中に響いた。

相変わらず退屈だった一日を縛り付ける鎖が、やつと解かれる。  
学校は嫌いだ。大嫌いだ。

それはまあ授業を聞くのがかったるいとか、ノートを取るのが面倒くさいとか、わざわざ朝からコンビニに寄つて昼飯を買う必要があるとか、そんな当たり前の

理由ではあるのだけども、嫌な理由なんてそんなもんでいいだろ？  
「相川さん」

帰りのホームルームが終わり、カバンを持って机から離れようとした瞬間、いきなり

首筋に衝撃が走り、そして能天気な声が響いた。

「ちょ・・・ちょっと！痛いって！痛いって彼方！」

抱きついてきたのは、自分の数少ない友人の一人である水無月彼方だった。

オレは中々の重量である彼方を、首でぶんぶんと振り回して離そうとする。

「ぬつふーん！ダメだよー。私はヒルの彼方という異名で呼ばれるくらい

へぱりつきには定評があるんダカラー！」

オレの必死の抵抗に、とても楽しそうにケラケラと笑いながら彼方が言つた。

「てめ、離せつてーマジで首がもげるからーはーなーせーはーなーせえー！」

本当にもげそぐになる首の重量感に耐えられなくなつたオレは、無理やり手で彼方を突き放した。

「んもー相川さんヒドーイ。これは彼方なりのスキンシッパンノデスヨー」

ふんわりといい臭いのする一いつのおさげが、オレの前でさらりと揺れる。

高校二年になつてすぐ、窓側の一番後ろの席からボーッとグランドを眺めていたオレに、

「ねーねー君何見てるのー? もしかしてカッコイイ男子でもいるンデスカ? ん? ん?」

なんて非常にバカっぽく話しかけてきたのがコイツだつた。以来何故かオレに寄つてくるようになり、そのまま成り行きでつるむようになつた。

基本的にオレは女同士の付き合ひが嫌いなので、他の女子とつるむところとは少ない

のだが、こいつの場合はこの何とも能天氣な空気がどうと無く気持ちよくなつて一緒にいる。

ところが、コイツのストーカー具合に、一緒に居ざるをえない状況である。

「つかねー! ツカネー! ツカつかツカネー! 何また一人で帰る? とシテんのよー! ...」

んぎやあんぎやあと産声並みの甲高い声で攻め立てる彼方。

最近な一人で帰りたくてコイツの目を盗んで帰る? とチャレンジするのだが、毎回失敗している。

「いやせ、オレにもプライベートタイムつてのがあるわけよ。一人の時間つての?」

つんざくような声に顔をしかめながら、オレは無表情に彼方へと反

論する。

今も彼方はとてつもない高速で首を振り続け、そのお下げがヘリコプターよろしく

ブオノブオント回転し続けていた。

「はち切れるほどにノウ！アナタにはヒトリノ時間なんて悠長なものはないですよ！」

そうじゃなくても相川さんは休みの日はヒッキーな人なんだから、親睦を深める

ためには下校時間をキヤツチアンドリースしかないのですよ！

よー。」

「リリースつてことは、返してくれるわけ？時間」

「ノウ！言葉のアヤデス！！」

かなりぐだらなく、また人に聞かれると壮絶に恥ずかしい会話を彼方限定で

大声展開しながら、オレ達は夕日の中にたたずむ校門へと向かつた。校内用のスリッパから靴に履き替えて、校舎から出る。

ふわりふわりと、秋の風が頬に触れ、真っ赤に色づいた景色が眼前に焼きつく感覚。

この季節特有の、空を覆う雲の隙間からゆわんゆわんと覗く夕日。山頂のアスファルトから広がる空は、古アパートのベランダから見える空よりも、ずっと近く見える

これだけはこの学校の良いところだなと、ボンヤリと思つた。

「ホラホラ、ぼーっとしてはダメデスヨー。どうせ帰り道別れるんだシ、バツチリ

二人の愛を語りあわなくてはイカンのデスヨー！」

「むーん彼方ちゃん。そういうのは大声で言つた。勘違いされちゃうから」

トテトテトテと、元気の有り余るハムスターみたいにせかしなく動く彼方の

足に合わせ、オレも大幅に足を広げてアスファルトの斜面から下つ

ていく。

校門をくぐると、降りてすぐの右側テニスコートでは、部員たちがスパコンスパコンと必死に汗を散らしていた。

その様子をオレたちは、頑張ってるねなんて言いながら眺めて歩いた。

すると、新入部員と思われる玉拾い中の男子が、こちらを不思議そうに見つめている。

それに気づいた彼方が「む？ 私達の美貌に見とれてる？」なんて言ったので、オレは

「たぶんオレだけに見とれてるんだよ、ナイスバディだし」と返した。

その急なカウンターに面食らつた彼方は、むむむと唸りながら肩を小突いてきた。

確かに、ずい分と慎重差のあるオレ達は、周りから見ればとても不釣合いに見えるだろ？

彼方は中学生と間違われるほどの中顔と低身長で、オレは同年代の男子並に背があるので。

彼方からは、背つていうか何か全身でカインですよ、主に胸とか、と言われたけど。

「んでそのケーキがデスネ……んにゃー…そういうえば相川さん今朝の二コース見ましたか？」

「お前はいちいち奇声を発するなよ……あー、一応見たけど。もしかして通り魔か？」

彼方が、さつきまで話していた昨日作ろうとした特大チョコケーキの失敗話を急に

切り上げ、オレが今朝観たテレビニュースの話を振ってきた。

いつもおちやらけた態度から、少しばかり心配の色が見えている。

「あれって確か相川さんの家の近くデスヨネ？ 赤街駅。相川さん大丈夫デスカ？」

なんだか絵に描いたような心配顔をして、彼方がオレに聞いてくる。こいつのこりいうわかりやすいところはとても好きだ。扱いやすくて。

「んーどうだろうね。もしかしたら通り魔さんに襲われて死んじゃうかもう・・・」

わざとらしく、およよと親指を噛んでみる。

「ななな！そんなことはさせませんよ！相川さんの最後を看取るのは相川さんの親友であるこの彼方の役目ナノですから！」

「いや・・・そういう問題じやないから・・・」

「うん、前言撤回。やっぱこいつ扱いにくい。すっごく扱いにくい。」

「まーせいぜい気をつけるよ。まだ死にたくないしね」

ふふっと笑つて返事をし、オレはそういうえばと今朝のニュースの内容を思い出した。

そう、この町で起きた、ある連続殺人事件。

のどかな田舎町で、中高生の女子だけを狙つた通り魔事件が、今オレの住むアパートの

近くで起こっている。

被害者がまるで獣に食いちぎられたようにズタズタにされ、事件が起こつた赤街駅

周辺に遺棄されているのだ。

その遺体の状態は凄まじく、もはや人間の犯行とは思えないほどのものだとか。

またその時間は通勤途中のサラリーマンや下校中の学生が多く通る時間帯であるにも

かかわらず、事件を目撃した人間は全くいない。

死亡推定時刻に駅周辺にいた人物に取り調べをしても、みな一様に「事件は見なかつた」と答えたそつだ。同様に不審者の目撃情報もない。

それこそ、今回の事件は「現実味のない事件」なわけだ。

まるでファンタジーの世界で起きたことのよつたな、現実味のないこと。

ある意味でそれは、今オレが一番求めてる」となのかも知れない。その虚構の中にある、「絶対の現実」が。

「おーい。大丈夫デスかー？生きてますかー？ライブアライブってますかー？」

彼方のまぬけな声で埋没していた意識が引き戻される。

「あ、悪い。ちょい今朝のニコースのこと思い出しても」

「もー彼方を差し置いてボーッとするなんてヒドイですよ。

つかもうここまでだし。ここまでだしー」

ぶーぶーと文句を言いながら、彼方が腕をぐるぐる振り回している。気づくと、自分が立っている場所はもういつも彼方と別れるY字路だった。

「あーわーったわーった。明日はもつとけやんと話聞いてやるから静かにしろい」

腕を振り回したままオレの胸に顔をぐりぐりと埋めてくる彼方を引き離し、オレは

足早にY字路の右側の道へと入った。

「とにかく気をつけてくだサイネ。殺人が起きたのって、ちょうど今頃ナンデスカラ」

そそくさとその場から立ち去つたオレの背中に、彼方の声が刺さつた。

なんせ、この季節の夕方つてやつは、かなり雰囲気がいい。ほんやりと灰色の雲が空に浮かんで、濃い青色が広がる向こうには、じんわりと

オレンジが染み込んでいる風景。

少し肌寒くなつたりして、学校の女子達はカーディガンなんか羽織りだしたりする。

だけどもオレはなぜか寒さには強いため、来てこるのは学校指定の制服だけだ。

何でもどいじの有名ブランドに依頼して作ったとかいひの紺色とピンクを貴重とした

制服は、どいとこうような特徴のないウチの高校の、唯一の売りである。

オレははっきり言つてこの制服のデザインは好きくないのだが、一応有名ブランド

とこことなので、これも女の性か悪い気はしていない。

そんなわけで、オレは今、わざとよりも歩幅を緩めて、線路沿いの道を歩いていた。

道沿いには穏やかな明かりが漏れる民家が並び、時折流れてくる夕飯の匂いなんかが、

今の時間帯が多数の家庭が最もにぎやかに家族と過ごす時間であることを表している。

そんな所を少しだけ複雑な気分で歩くオレは、今日の夕飯はどいじようかなあと

考えて、その複雑な心の内を誤魔化していた。

ふと氣づくと、駅だった。

「あちや、またぼーっとしちゃったなあ」

これでは彼方と歩いていた時と同じだ。最近このぼーっとするとうか、どこか今

自分がやつていることの実感がわからない時が多い。

なんだが、ずっと海に浮いてるような感じだ。潛水服を着てる海にいるつていうか。

「んー? まさか若年性のアルツハイマーとかいうオチじゃないだろうなあ」

どこか自嘲した苦笑いをこぼして、そばにあつた自販機に少し体を

倒した。

この駅はあまり大きい駅ではないので、出口は一つしかない。

だけでもこの駅から通う人は結構多いのでこの時間帯は一つしかない出口から

わらわらと色んな人が出でくるのが見える。

学生とか会社員とかおばちゃんとか変なかつこしたに一ちゃんとか、とにかく、多種多様な人達がわらわらわらわらと、アリみたいに出てくる。

けれども誰もが共通しているのは、誰もがみんなとても疲労の溜まつた、精気のない、

まるでマネキンかなんかのような顔をしていることだ。

まあ、一日の労働を終えて帰つてくる人が大半なのだから、当たり前と言えば

当たり前だけだろうけども。

でも、こんな人達ならば、自分の近くで殺人が起つても、もしかしたら気づかない

なんてことがあるかもしれないなあと、またぼーっとした頭で考えた。

「あー やばいやばい。早く家帰つて夕飯作んないと

よつこいしょと、自販機から離れて、オレはいつもの帰路へと足を向ける。

駅から離れて、踏み切りを渡つた寂れた路地へと向かう。

この路地はどちらかという人気のない雰囲気で、ちらほらと街頭があるだけの路地だ。

こんな人寂しい路地を帰り道にするような変わり者は自分だけなんか、ここは

帰宅時間である今も人通りはほとんどなく、たまに車が頭の痛いヘッドライトを

光させてすれ違つてくるだけ。

なるほど、たぶん通り魔があつたのはこの路地だな、間違いない。  
そんな確信をもつた直後も、しかし別に怖くは無かつた。

また、何とも実感の無い、潛水服の感覚。

チリチリチリ、オレが歩く路地の上を電灯が寿命を消費している。  
トボトボトボと、人のいない路地をオレの足が踏みしめていく。  
ふいに人影が見えた。

まだほんの少しだけ空の明かりは残つてゐる。ほんの少しだけ。  
恐らく30mほど先にいるであろう人影にこつちの方向に向かつて  
歩いてくる。  
心なしか足取りはきびきびとしているようで、さつきからカツカツ  
カツという  
音が、この静かな街頭に聞こえている。

とぼとぼとぼ。オレが歩く。  
カツカツカツ。人影が近づく。

恐らく、距離が10mほどになつた時だらつ。うつすらと照らす街  
頭の先に、人影の  
足元が少しばかり見えた。

人影は男物の革靴を履いているようで、さつきから歩くたびちらちら  
見えていた。

なるほど、この人影は男なんだなあ。そつと体も背が高くて  
ガツチリしてゐる。

男が、止まつた。男の人影が見えた瞬間と同じくふいに、男が立ち  
止まつた。

ん?と思つて、思わずこちらも立ち止まつてしまつ。

男の足が、街頭の下でしつかりと確認できた。多少の明かりが照ら  
すこの状態でも

服装はわかりづらいことから、たぶん黒っぽい服をきてゐるであろ

うこともわかつた。

男が一步、カツリと音を立ててひっかに踏み込んだ。  
オレの体はビクッと、微かに反応した。

「相川さゆりだな」

声が、男から聞こえた。

「おー、お前だよお前。違つたら違つて言えよ。相川さゆりだろ  
う？お前」

まだ、若い男の声。恐らく20代前半だらうか。少しだけ高めの、  
中性的な雰囲気の

漂う声。だけどもどこか威圧感のある声だつた。  
じんわりと、男の姿が、街頭の下に現れてくる。

頭はこの国には本来いないであらう、自然な金髪。サングラスをか  
けたその顔は、

隠していても西洋人独特の、整つた顔立ちであることがわかる。  
口には咥えタバコをしていて、そこからはもくもくと煙が中へと漂  
つている。

しかし、最も特徴的なのはその服装。中々街中では見ないような、  
教会にいる

神父の服を着てゐる。どつりで黒っぽい服装だと思つたわけだ。  
男が、かつたるやうに叫んで。

「おー、何とか言えよ、いつかはとつとと終わらせたいんだ。わか  
るだらう？」「う？」

こつりと、もう一歩だけ、男が踏み出した瞬間、  
オレは、今自分が歩いてきた道に向かつて、走つた。

なぜかはわからない。

別に、その男が例の通り魔だと思つたわけではない。  
ただ、男から感じた、その何かに、まるで心臓がひっくりかえるつ  
な衝撃。

「そいつが今そこにある実感」に、驚いてしまつたからだらう。

八ア・・・八ア・・・八・・・八・・・

自分は今、あるある路地裏にいた。

必死で走る途中に見えた、こんな寂れた路地に似つかわしくないそ  
れなりに

立っている何かの店や、どうもそのなかわからないビルの隙間に、少しだけ見えたその敷地と敷地の隙間に、オレは身を隠していた。

「あ・・・はあ・・・はあ・・・・・・あ・・・・は・・・・」

久しぶりの全力に、オレの体はぐつたりとうなだれた。

頬を火照らせて、男が追つてきていないことをチラリと確認し、安心したのか、

思いつきりはあゝとため息をついて、顔を伏せた。  
体育座りの体制になつて、顔を膝の隙間にうずめる。  
本当に、こんなに必死になつて走つたのは、いつごいろどうか。  
最近は何だか無氣力で、そもそもこんなに真剣になつたこといなん  
て無かつたなあと

「ハアツ・・・・ハア」

上の壁から、オレの呼吸ではない音が、聞こえた。

ブルリと、今度は体の中の本能が、危険を告げる。

逃げると、今度は本当にやはいと、確実な殺意だと、体が教える。

しかしそれが一体何なのか確認することしかできなし

さっきの男のことだ、そうでなくとも頭が混乱しているこの状況で、とても

今上にあるであらう異常を、確認する」とはできなかつた。

ブルブルと身を震わせながら、動かない頭を必死に回転させる。

・  
・  
・  
上のやつはなんなのか、さっきの男と関係があるのか、それよりも・

こいつは、人間なのか。

否、ありえない。絶対に人ではない。絶対に、確實に。  
人が斜面90度の壁にはりつけるはずがない。人が、こんなにも太  
く禍々しい息づかい  
をするはずがない。

「ガヒツ・・・ググフ・・・ギヒツ・・・」

息遣いとともに、異形のそれが、気持ちの悪い声を上げた。  
全身におぞましさが走り、ぞくぞくと背筋に電流が上る。  
オレはその感触をバネに、腰を上げてしゃがむ状態になり、思い切  
り壁を蹴つて  
前方へと弾け飛んだ。

直後、今オレが居た場所、黒い何かが一直線に通り抜けた。  
ドゴン！と音がして、地面が一瞬で抉れる。

一瞬前まで自分がいた場所がクレーターになるのを目撃したオレは、  
眉間に流れる

冷や汗の冷たさを感じながら、路地裏の出口を背に足を踏ん張り立  
つた。

瞬間、目に映つたそれは、不思議なものだった。ただただ、不思議  
なものだった。

それは真っ黒い獣、まるで熊のような毛むくじらの巨体に、耳も  
鼻もない。

ただその丸い、ぼやけたかかしのような輪郭には、禍々しく、  
しかし

人間と同じだけの知性を持つていてと思われる輝きが一つと、巨大  
な牙がハアハアと  
いつ荒い息と同時に上下しているのが見えるだけだ。

ぞつとした、これは何のかと。自分はこんなものは知らないと。全身を冷たい水が走つていい、滴り落ちていく。

理性にまみれてしまつた人間の感覚が、ほんのわずかな獣の本能が、オレに告げた。

もつ無理だ、逃げられない。もつ死ぬしかない。

「そりやないだろう・・・」

小さく咳いて、出口へ向き直つてと疾走する。

こんな時だけ出でてくる本能なんかに耳をかたむける必要はない、人は今まで理性で

生きてきたのだ、今だつて、理性で切り抜けられるはず。

さつきに路地に出れば、この巨体をもつ異形ならば逃げ切ることができるはず。

とにかく駅までいけば人はいるんだ、何とかなるはずだと、半分麻痺した理性が言つ。

ジャリつと滑り込むよつて路地裏へ出ると、そのまま自分が来た道を走り抜けようと・・・

愕然とした。さつき、この異形を見た時とは比べ物にならないショックが、駆け巡つた。

ちりちりと、定期的に並んだ街頭が、音を立てて自らの寿命を削つている。

先の一切見えない、見たこともない煉瓦敷きの道が、延々と暗闇の中に消えている。

どこだよ、こい。

頭の処理が、一切できない。全ての回路が、駆け抜けるように起つた出来事で、

焼けきつている。

オレはゆつくりと振り向いて、背中に突き刺さりうとする大きな爪を、ぼーっと見つめた。

鋭利な獣の刃が、オレの背中の皮膚に触れようとした瞬間だつた。乾いた音が、見たこともない路地に、響いた。

「なるほどね、無限回廊か。よく言つたもんだな」

少し高い男の声が前方からして、オレはぼーっとした頭のまま、その方向を見た。

薄暗い街頭の中、神父の格好をした男が、もうもうと煙の上がる何かを手に持つて立つていた。

「確かにこれじゃあ明るいとこ歩いても一緒だわな。歩いてたら急に自分が見たこともないような道にいて、気づいたら後ろから刺し殺されてるってわけか」

男は、カツカツカツと、じつに向かつて歩を進めた。

「いやしかし本当に手間取つたぜマジでよ。お前らが悪魔憑きを探してるのは

知つてたが、まさか無差別殺人を始めるとは思わなかつた。オマケに使い魔まで

出すなんてな。本当に、無鉄砲なのか用心深いのかわからんえーよお前らは」

男は悠々と喋りながら、オレと異形の前まで来た。

すーっと吹く冷えた風に、短い金髪がさらさらと揺れている。表情はサングラスに

隠れてわからないが、声色から機嫌がいいことがわかつた。

「さて、んじやまあお日当てのもん見つけたとこで悪いんだけどもね」

男がふへへと笑つて、手に持つたそれを異形へと向ける

街頭の明かりに照らされたそれは、角ばつた外殻に、鉄パイプが通つたような

形をしていて、音が握っている部分の底からは、シンプルな十字架のキー ホルダーが風にゆらゆらと揺れていた。

「わねじゅあじつからつ藏毎じてもひおひか。せひ、わつわと道二つ  
くまへ

許しを請えよ。救いよひのねえ子羊がよお

男が言って、引き絞るように人差し指を動かそうとした時、

「ウ・・・ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアツアアガハアガガア  
アアアアアアアアアア」

直後、男二張り落二十三の巨太な魂。  
獸が、その動きを合図に、野太い啼き声を、張り上げた。

しかしそれは乾いた音とともに、異形の意に反してまた上にまた跳ね上がっていた。

「ハツ！ やる気だけはあるつてか！？」

男が笑い、ぐうと足を折り曲げて後方へとバッケステップする。があつと吼えた異形がその姿に何の考えもなしに飛びつき、そのま頭を撃ち抜かれた。

「があ・・・あぐわわこわ」アガハハコハ

叫び声をあげながらも、そのまま男への突進を続ける。

しゃこと右足を踏み込んで縁に出された卑謔な突きを もう食きた  
とばかりに

ぱっちりタイミングを合わせた右の回し蹴りで軌道をそらす。

「おいおい。頭悪いなお前。さつきからそれは当たんねーってわかってるだろー」

男はそのままの回転を緩めずに、振り向いた右足を軸にしてスラリと伸びた

左足を、空に映る月をバツクに高々と振り上げて、叩き落とした。男の踵が異形の後頭部に直撃すると同時に、ゴガンという頭蓋骨がぶち割れる

音がする。

「ぎ・・・、わい・・・」

身体の全てを管理する部位を破壊された異形は、そのまま地面へと倒れこみ、

かかしのような顔面を地面へとめり込ませた。

「やれやれ。楽しむ間もないつてのはこのとこかね」

あきれた顔をした男は、すっと上着のポケットへと腕を忍び込ませる。

まるで映画のクリント＝イーストウッドのよう、すっと上着から引き抜いた手には、

長さ30㌢ほどの細長いものが握られていた。

すっと伸びた木製の一本の棒、その根元より少し前の部分に、その棒よりももう少し

短い棒が、その中間部分までずつぽりと突き通されている。

それはいわゆる、十字架の形をしたものだった。

ただ一つ普通の十字架と違うのは、その十字架の長柄部分の先端が、釘のよう

とがつていることだ。

そう、それは十字架の形をした、一本の木の杭なのだ。

それを男は、突き通された小さい棒と長い棒の接続部分を握りこむようにもち、

異形の真上からギリギリとゼンマイ仕掛けのよう、ギリギリと引き絞っている。

男は腕を引き絞りながらニヤッと笑った。

「じゃあな、地獄でサタンによろしくたのむぜ。A m e n」  
アーメン

そのまま、男は異形の心臓部へとめがけ、腕を振り落した。

「あのー」

人つてのはあまりに混乱すると逆にとんでもなく冷静になるらしい。

今オレの額に向けられている銃口は、まるで氷みたいにひんやりと  
冷たい銀色をしていて、

この道具が人を殺すための物であることをとても納得をさせてくれる  
雰囲気を持っている。

だけどもオレはそんなことも何のその、平然とした声でオレに銃口  
を向ける

人物に話しかけていた。

「あのー・・・それ、何なんですかね?」

つづく

## 第一話・クレコレハッピーーストウッシュ（後書き）

でも、この小説を書かせてもらひたメイリHです。  
これは元々自分のブログにUPしているものを、より  
多くに人に読んでもらおうと載せたものです。

ボクは今小説家を田舎しているもので、とにかく  
読者さんの素直な感想と批評を受けたいと  
思っています。どうぞ感想などありましたら、気軽に  
書いてください。

なにはともあれ、ここまでお付き合っていただき  
ありがとうございました。おまけに

次回もお楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8996c/>

---

トリガ - ハッピ -

2010年10月17日04時37分発行